

## あとがき

この本の元となった『中医臨床』誌の「弁証論治トレーニング」コーナーはもう75回になりました。この間、大勢の読者に深い関心をもって愛していただいたこと、東洋学術出版社が重要なコーナーとして全面的に支援してくれたこと、そして私たち執筆者もそれに応えて努力したことから、順調に回を重ねることができました。まず執筆者の立場より、熱心な読者と、出版社の山本会長、井ノ上社長、編集者の森由紀さんおよびその他の協力者に心より感謝します。

弁証論治は中医学の歴史と発展の結晶であり、中医治療学の精髓です。長年の弁証論治の実践は中医学の存在意義と価値を表しています。その意義と価値は次のとおりです。まず、弁証論治は中医学の全人観によって人間の疾病を観ます。そして、望・問・聞・切の四診および耳診・爪甲診・人中診などの特殊診察法により、病気のすべての情報を把握し、確実な疾病の情報によって証を立て、それに対する治療を行います。これは「頭痛医頭」「足痛治足」の局所療法から脱却し、患者の体質改善と病気の治療を含んだ、全面的かつ根本的な治療ともいえます。特に生活習慣病が多発している現代の高齢社会に対して、弁証論治は重要かつ現実的な意義があります。これに対して、西洋医学の診療は病気の原因を細胞・DNAのレベルまで追求し、異常があれば治療します。しかし、異常がみつからない場合、ほとんどが「要観察」のまま放置されることが多いです。そのような半健康者（症状はあるが、検査すると異常が認められない）に対し、弁証論治では積極的に治療することができます。このような西洋医学的治療の不足を補完できる中医弁証論治の治療価値は今後ますます証明されていくことでしょう。

本書で紹介している症例は75回分の「弁証論治トレーニング」コーナーからの抜粋です。紙面には限りがあるため、一部の症例は割愛せざるをえませんでした。これについては続篇に期待していただきたい。本書は症例を中心にして、臨床応用・病因病機・弁証理由・治療原則・中薬・方剤・経絡・経穴・手技など多岐にわたってわかりやすく解説をしているので、読者の理解と学習の一助になることと思います。中医弁証論治のトレーニングはこの本から始まります。これからもより多くの読者が弁証論治を熱心に学んでいかれることを心より祈っています。そうすることで日本における本格的な中医弁証論治は深く根付き、きれいな花を咲かせ、大きな実を結ぶことでしょう。

2012年夏 吳澤森